

ただいまNPO法人設立準備中

——「子ども大学よこはま」開校を目指して

内田ふみ子 (子ども大学よこはま事務局)

大学の先生がボランティアで子どもたちに教える「子ども大学」は、ドイツの大学で始まり、ヨーロッパに広がっている。日本では2009年に「子ども大学かわごえ」がNPO法人により開校した。以降「かまくら」「ぐんま」が開校し、「よこはま」の開校に向けて、今、事務局として動いている。

私自身の横浜での教育活動は15年ほどになる。現在の本業は編集・執筆業だが、一時期は行政の支援を受け、ソーシャルビジネスとして、本業で取り組もうと試みたこともあった。その活動を振り返りつつ、子ども大学のご紹介をしたいと思う。

「お金」の教育から始めた地域活動

活動のスタートは、子どもたちへのお金の教育活動だった。とはいえモデルもなく、手探りで始めたのが、家庭でのおこづかい調査だった。市民活動のお祭りで結果を展示していたら、小学校のPTA役員さんから「子どもとおこづかい」のテーマで講演を依頼された。「私たちの気持ちをわかってくれる人の話が聞きたい」というのが、その役員さんの依頼理由だった。

子育て支援は乳幼児期でふつり途絶える。子どもが小学生になったからといって、子育ての不安や悩みが解消されるわけではない。参加した母親たちからは、モノやお金のやり取りによる、友だち関係や親同士の付き合い方の悩みを多く聞かされた。私がこの悩みに対する正解を持っているわけではない。乳幼児期の子育て支援と同じように、不安や悩みを共有する場がまず必要と考え、子育てのちょっと先輩的な立ち位置でお話し、最後に、グループで自由に話す時間を作った。これが好評で、これまで口コミで40か所あまり

のPTAや子育て支援グループにお邪魔した。

次にいただいた依頼は、小学生の父親世代でもある商工会青年部から、子どもたちに商売の体験をさせるので、事前学習の講師をしてほしいというものだった。プレッシャーの中、やり遂げたら子どもたちが喜んでくれて、これが、商店街と協力して行う「こども商店街」のきっかけとなった。

「こども商店街」は現在、休止中である。教育と地域活性化の効果に期待した行政からは、専門家の派遣など事業化に向けた支援を受けた。しかし、助成金だけに頼らずにソーシャルビジネスとして自立させるのは困難と判断した。ただ機会があれば「子ども大学」のゼミとしてやってみたい。

お金は、社会的道具である。社会や他人と関わる時に欠かせない。「お金」の教育活動を通して、お金の使い手である「人」を育てることの必要性を感じていた。外の世界に興味を広げていく年齢の子どもたちに、金融経済の仕組みだけでなく、科学や文化、芸術も広く学ぶ機会を作りたいと思った。「子ども大学」は、それにぴったり当てはまる。

ドイツ発「子ども大学」との出会い

ドイツ発の教育活動には、「子ども大学」のほかに「ミニミュンヘン」がある。ミュンヘンオリンピックの会場跡を利用し、隔年の夏だけ出現する、子どもが作る「子どものまち」だ。1972年の国際児童年にNPOの提案で生まれた。

このミニミュンヘンは、「子ども大学」よりひと足先に日本で広がった。第1号は2002年に開催された千葉の「ミニさくら」である。町の市民として登録し



子ども大学かわごえの授業風景

た子どもたちは、職業紹介所に行き、仕事を見つけ、働く。働く人も、お客さんも、子どもたちである。市役所もあり、議会もあり、市長も選挙で決める。現在、「子どものまち」は全国で80余りに増えている。主催者はNPO法人や子ども支援の公的部門、大学など様々である。(参考1)

私が「子ども大学」を知ったのは、川崎市の田園調布大学主催の「子どものまち、ミニたまゆり」に、2年間、実行委員として関わったのがきっかけだった。全国の“子どものまち”主催者が集まるサミットが開催され、ドイツからミニミュンヘンの主催者が来日し、講演の中で「子ども大学」が紹介された。「子ども大学かわごえ」の酒井一郎理事長も、この時、田園調布学園大学の教授で、「ミニたまゆり」の代表として参加し、これがきっかけで「子ども大学」を設立した。(参考2)

「子ども大学」は、「なぜ、飛行機は飛ぶのか?」といった素朴で根源的な問いから始まる。「なぜ」と自分の頭で考えたり、多様なものの見方や考え方に触れる。それは学習指導要領の枠組みの中で学ぶ、小中高校の授業とは違うものである。それこそ「大学」の授業である。

日本の「子ども大学」

「子ども大学」は、大学を会場に、大学の先生や専門家が講師となって授業を実施する。企画運営はNPO法人が行っている。

国内で初めての「子ども大学かわごえ」は、ドイツを手本としながら、試行錯誤を繰り返して設立された。なかでも大変だったのは、大学の協力を得ることだったと聞いている。「かわごえ」では、大学の先生に、個人的なボランティアとして協力をお願いしている。

学生の対象は小学校4~6年生である。「はてな学」「ふるさと学」など、講義内容は自然科学だけではない。

「かまくら」は大学自体が少なく、建長寺や円覚寺

といった寺院などで「子ども大学」が開かれている。かつて寺院は学校だった。

各地の「子ども大学」は共通の枠組みを持ってはいるが、地域性も尊重する。横浜市には、教育機関、研究機関、企業などが数多く集まっている。教育資源は豊かで、これまでも、開校したら授業で協力したいという申し出もたくさんいただいている。反面、規模が大きく、まず最初に開校する地域を絞り、協力者やスタッフを揃えることが課題となる。

最近では、大学の地域貢献活動が活発になり、夏休みなど単独で子ども向けの体験教室を開く大学も増えている。NPO法人の「子ども大学」は、保護者も含めた市民がカリキュラムの作成や運営に直接関わる。一つの大学の枠を超え、地域の大人たちが、子どもたちにとって本当に必要なことは何か、議論しながら作り上げている。そこが大きな相違点である。「かわごえ」のスタッフには、地域のシニアや、会社員、教員経験者のほか、“学生”の保護者も加わっている。保護者をお客様にしないで運営に巻き込むことは大事なことだと思う。わが子以外の子どもたちに目を向けることは、親として成長する良い機会だからだ。

保護者に限らず、子どもに教える前に、まず大人が学ばなければならない。NPO活動では、スタッフとして関わりながら、大人も成長できる。

“意識の高い親”だけでよいのか

これまで関わった子ども向けの講座には、親が付き添ってくることも多い。相当な遠方から参加していることもある。

NPOなどの講座は、学校経由で告知してもらえることは稀だ。インターネットやフリーペーパーでの告知か、運よく新聞に記事として紹介されるか、だ。それを見つけ出して申し込むのは、日頃から教育情報にアンテナを張っている保護者だと思われる。子どもたち以上に真剣に話に聞き入ったり、後で講師に質問にやってくる保護者を、スタッフたちは「意識が高い親」



子ども大学かまくらの授業風景

「教育熱心な親」と評する。でも、それでいいのかな、と疑問に思っている。

保護者が子どものためにわざわざ時間を取って、民間の教育活動に参加するような家庭では、子どもたちも塾に通い、学校外の学習機会も多いだろう。一方で、数百円の参加費も、親の付き添いも、負担になって参加できない子どもたちが存在する。私の周囲のNPO主催者は、常に資金確保に腐心している。「子ども大学」も受講料なしというのは考えにくい。

ミニミュンヘンは、バカンスの時期に開催される。裕福な家庭の子どもたちは親のバカンスについていく。ミニミュンヘンに参加する子どもたちは、親が働いている間、子どもの町で働き、ランチを食べることができる。そのような福祉の視点を持った活動であることを前述の「サミット」の講演で知った。「子ども大学」も、より多くの子どもたちが容易に授業にアクセスできる工夫はあるのではないかと思う。

最後に

食育とか、職業教育とか、国の教育施策には「**教育」がたくさんある。それぞれ必要なことではあるけれど、それとは関係なく、好奇心を持つこと、知ること、学ぶこと、考えることは、人として純粋に楽しい経験だ。それを子どもたちに保証するのが大人の役割だと思う。どうやったらそれが実現できるか、みんなで知恵を絞る場が、誰もが参画できる開かれた公教育としての「子ども大学」ではないか。

開校まで、乗り越えなければならない壁はまだたく

さん残っている。ただ頭の中であの先生にこんな授業を、とあれこれ企画を想像していると楽しくてしかたない。NPOは義務で参加するものではない。裏方も楽しめることが大切だ。

これまでの教育活動で、いくつか団体を運営してきた、何度かNPO法人設立の一手手前まで行った。実現しなかった理由はそれぞれだ。今度は、「かわごえ」「かまくら」という先行する事例がある。事業を立ち上げるには大きなエネルギーが要る。何度も立ち上げたり、つぶしたりする余力は、正直もうそんなに残っていない。「子ども大学」を最後のチャレンジにし、軌道に載せたい。だから「面白いよ」「楽しいよ」といろんな方たちを巻き込んでいる最中である。

(参考1)

『こどもがまちをつくる「遊びの都市(まち)ーミニ・ミュンヘン」からのひろがり』木下勇・みえけんぞう・卯月盛夫 編著、萌文社、2010年

『地域で遊んで学ぶ、キャリア教育ーこどものまちで働こうー』酒井一郎・番匠一雅 編著、国土社、2008年

(参考2)

『問いを学ぶー子ども大学かわごえ ①～③』矢倉久泰(子ども大学かわごえ 理事/教育ジャーナリスト)

Child Research Net「子ども未来紀行」2009年3月18日掲載
<http://www.blog.crn.or.jp/report/02/82.html>

(筆者プロフィール)

内田ふみ子(うちだ ふみこ)

編集・執筆業。教育書等の出版社編集部勤務を経て、ファイナンシャルプランナーとして独立。同時に地域で、子どもの教育活動を開始。子育て中の女性のライフプラン講座など男女共同参画センターへの協力、多重債務者問題にも取り組む。現在は専門学校非常勤講師、JAXA宇宙教育リーダーとして宇宙教室のボランティアも。

	テーマ	講師
第1回	アベノミクスとはなんだろう?	ハリウッド大学院大学 江夏 健一 学長
第2回	地図から学ぶ ～川越に城を築いた秘密とは何か…	東京大学大学院 布施 孝志 准教授
第3回	渡辺真理さんと話そう!	フリーアナウンサー 渡辺 真理 氏
第4回	音にいのちをふきこむ「音楽の魔法」 ～初音ミクと歌う里山のうた～	尚美学園大学 漢那 拓也 研究員
第5回	怪物、ゾンビ、ロボットと人間の違いは何か?	東京国際大学 渋谷 哲也 准教授
第6回	「21世紀型スキル(世界標準の力)」について 協調学習から賢く学ぶ	東京大学大学院 三宅 なほみ 教授
第7回	川越市から宇宙に飛び出せ!体験ロケット教室	東洋大学 藤松 信義 准教授
第8回	宇宙の話をしよう! ～日本の宇宙開発～	JAXA宇宙科学研究所 阪本成一 教授
第9回	おもしろさとふしぎなことばの魅力…	慶應義塾大学大学院 大津 由紀雄 教授
第10回	やさしい経済学	東京工業大学 池上 彰 教授

参考：子ども大学かわごえ 平成25年度授業一覧

	テーマ	講師
第1回	考える力ってなあに	東京大学 養老 孟司 名誉教授
第2回	外国とのおつきあい	元カナダ大使 溝口道郎
第3回	夢をもってオンリーワンをめざそう	川越胃腸病院 望月 智 院長
第4回	建長寺ってどんなところ? お坊さんって何をやるの?	建長寺 高井正俊 宗務総長
第5回	技術が世界を動かす	長岡技術科学大学 中村 和男 名誉教授 三菱電機(株)住環境研究開発センター 山崎 起助(元研究員)

参考：子ども大学かまくら 平成25年度授業一覧